

おに
鬼のひとり娘

むかし、鬼にひとり娘がいて、その娘が、はじめて人間を食べる年^うになりました。ある日のこと、鬼は、街道筋をきれいな男が通ると聞いたので、娘をつれていきました。そして、

「おまえははじめて人間を食べるんだ。今ここを、きれいな男が通るそだから、その男を食べてしまえ」といいました。娘は、

「いや。はずかしいからいや」といいました。

「そんなこといわないで、食べるんだ」

「おとうさんがそばにいてくれるんなら、食べるわ」

そう話していると、向こうから、きれいな男がやつて来ました。あんまりきれいな人なので、いくら鬼が、

「さあ、食べる。そら食べる」といつても、娘ははずかしくて食べることができん。すると、男のほうも食べられると困るので、

「それなら、私と勝負をして、あなたが勝つたら食べてもらいましょう。あなたが負けたら、こゝを通させてもらいますよ」といいました。

そこで、鬼が行事になつて、娘と男は腕相撲することになりました。男は強くて、娘はすぐにひっくり返されてしまいました。

そこで、つぎに足相撲しました。やつぱり男が強くて、娘はひっくり返されてしまいました。鬼は、

(これでは、食べる食べるといつても、食べられるわけがない)と思つて、家来の鬼をふたりつれてきました。そして、こちらは家来と娘の三人、あちらは男ひとりで、向かいあつて首にひもをかけ、ぐつとひっぱり合つて、首相撲しました。それでも男が強くて、鬼はみんなひっくり返されてしまいました。

男はそこを通つていつてしましましたとさ。

おしまい